

コム・デ・ギャルソンを着る人たち —文化人類学的視点から—

工藤 諒真

1969年に活動を開始し、今なお世界のトップブランドとしてファッション界の注目を浴び続けるコム・デ・ギャルソン。そしてそのコム・デ・ギャルソンの服を好んで纏い続ける人々はギャルソニストと呼ばれ、集団的ファッションスタイルが見られなくなったといわれる現在でも彼らは異様な存在として認知されている。全身をコム・デ・ギャルソンの服で固めるその熱狂的な姿勢から、彼らはしばしば「宗教的」とも揶揄されてきた。

これまでに蓄積されてきた衣服の役割を巡る数々の言説や、「コム・デ・ギャルソン研究」は多岐に渡るが、衣服は着用して初めて意味を成すものであるにも関わらず、それらの先行研究では実際に日常で着用している人々への調査がほとんど行われていない。そこで、コム・デ・ギャルソンの服を「日常で着用する人々」に焦点を当て、彼らギャルソニストが「なぜコム・デ・ギャルソンを着るのか」という点から、ブランドの特異性・影響力を明らかにすること、そして既存の衣服の役割をめぐる言説の検証、およびその新たな視点を加えることを目的として調査を行った。加えて、同調志向が強いとされる日本社会においてなぜギャルソニストという特徴的な集団が形成されているのかという点について、その原因の一考察を示すことも目的の1つとした。調査手法は半構造化インタビューおよびオンラインフィールドワークを採用した。ただし、オンラインフィールドワークはインタビュー調査に繋げるための、あくまで補助的な手法としての位置づけとした。インタビューはインスタグラム上でリクルートした人物の他に筆者の知人も含めた10～50代の男女10名に行った。

調査の結果、デザイン行為やビジネス手法など、全てを含めた意味での「クリエイション」に対する姿勢が他の多くのブランドと大きく性質を異にしており、そのことがファッション界において確固たる地位を築き上げたこと、そして多くのギャルソニストを魅了している所以であるということがわかった。また、広義での「差異化」を意味する、人間の根源的な欲求である「卓越化」とギャルソニストが強く意識する「逸脱」という2つの欲求を、ブルデュエの概念を援用しながら日本独自の社会背景を踏まえて分析することで、日本でギャルソニストという集団が誕生した原因の一考察を示すことができた。

そして、より個々の「日常的実践」に焦点を当て、着用者それぞれが「コム・デ・ギャルソンを着る」ということに見出す“意味”について考察し、その結果として、いつの時代も機能性や社会性、デザイン性の面からばかりで語られるファッションにおいて、そのどれとも違う、着用者との個人的な関わりによって生まれる「衣服の役割」というものを見出すことができた。

(指導教員 照山 絢子)